

2000年度卒業論文要旨

読谷村の「紅いもで村おこし」問題点と可能性

藤井 麻由

甘藷は原産地が中南米の作物である。その甘藷は中国、東南アジアから、琉球王国時代の沖縄を経て、その後日本に伝来した。沖縄では300年間主食として作られてきた作物でもある。しかし、第二次世界大戦後は主食は米へと移り変わり、沖縄県でも甘藷栽培は急激に衰退していった。ところが近年の健康ブームの中で栄養食品、機能性食品として、甘藷の中でも紅いもと呼ばれる身が紫色の甘藷が脚光を浴びている。

読谷村は古くから、沖縄県でも有数の甘藷の産地として県民に広く知られており、紅いもの栽培もわずかだが行われていた。そのような背景から紅いもが村おこしの主役に抜擢される。以後この紅いも栽培の促進と、それを使った菓子類の開発

を中心として「紅いもで村おこし」をスローガンに、様々な地域活性化事業が実施されるようになった。村おこし事業の結果、現在では広く「読谷紅いも」の名も知られるようになり、紅いもや紅いも菓子の需要も県内外で伸びた。この事業は大きな成功を収めているように見える。

しかし現実には、生産体制が管理されていない為に、原材料の紅いもが足りないという事態が起こっている。このままでは、これまでの事業で得た成果に悪影響を及ぼすことが考えられる。

今後は、農家の紅いもに対する生産意識を改善し、また紅いもの新たな活用法のアイデアを求めていくことで、事業をよりステップアップさせることにつながっていくだろう。

民謡と地域住民の関わり——越中五箇山・城端を例に——

堀越 啓子

富山県南西部にある五箇山地方及び城端町では、郷土芸能活動が活発に行われている。この論文では、人々にとっての民謡とは何か、民謡は人々に何をもたらすのかを明らかにしようとしている。

五箇山三村の一つ平村での民謡活動や、城端の民謡祭りに実際に参加し、活動の実態を調査すると共に、平村の中学校で民謡に対する意識調査を行った。平村では、小中高それぞれで、保存会の指導のもと、郷土芸能活動を行っている。年に一度行われる地域の祭りでは、保存会、学生、その他住民が一つとなって民謡を披露している。アンケート調査により、郷土の伝統文化を守っていこうとする意識や、心から民謡を楽しんでいる住民の様子がうかがえた。

城端町では、近年、祭りに活気がなくなり、観光客も減少している。若い人も民謡に興味を持つ

ようにと、民謡をアレンジし、互いに独創性を競う新しいイベントが祭り50周年を機に始められた。伝統的なものから形を変えてはいるが、民謡を通して町の活性化を図ろうとする住民の姿が観察できた。

人々は、民謡によって、「楽しい」という気分を味わおうとする。また、同じ地域の住民が、民謡を通じて交流し、一つになろうとする。同じ目的のもとに活動して得られる一体感は、人々に安心感や安らぎを与えてくれる。

一方で、近年、少子化が進み、後継者が不足している現状が明らかとなった。平村、城端町それぞれで後継者育成に向けての試みがなされている。時代の流れと共に、人々が民謡に求めるものも変わっている。それに伴い、今後、活動の形がまた変化してゆくのもかもしれない。